

花鳥諷詠

一月号



花鳥諷詠®

令和4年1月 ■ 第406号 ————— 目次



新年の御挨拶 稲畑 汀子 2

花鳥諷詠選集 木村 享史 4
山本 素竹 6

虚子研究 虚子宛書簡を読む (三十)
明治二十五年七月七日桧垣精三郎書簡 (封書)
..... 黒川 悦子 9

虚子研究 『六百五十句』研究 (24) 14

この人の作品 奥村 里 19

ミニエッセイ コロナと俳句と私 20

一頁の鑑賞 日置 正樹 22
椋 麻里子 23

第三十二回全国俳句大会 24

風報 28

地区行事開催日程表 31

編集後記 32

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

花鳥諷詠選集

木村享史 選

特選五句

ドライブのみやげ花野に摘みしもの

井原片山 千代

新米の光飛び散る 精米機

柏原鈴木 兵十郎

噴煙の山を彼方に馬肥ゆる

我孫子 柳沢 いわを

千草活けやさしき妻となりにけり

高山原田 尚子

夕暮を月見団子と待つてをり

藤岡飯塚 柚花

二句短評

一句目——自肅の家居から抜け出しての久し振りのドライブ、家族揃つての楽しい日であつたのだろう。

解放された野で摘んだ秋草の数々、まだ家籠りの友へのせめてもの土産にと思う。やさしい俳人の交流。

二句目——今年も豊作であつたのであろう。ゆたかに張った粒揃いの玄米を袋から精米機へと流し込む。

回転し採まれながらしだいに精白されてゆく新米、一と粒ずつの放つ光に作者の感動と喜びがある。

入選六十句

迷ひたる歩に秋草の風やさし 福岡 黒田 純子

湖へ出る裏木戸開いてゐる良夜 松原 加藤 あや

赤い羽根つけて自肅の解けし街 太宰府 柴田慧美子

溶岩原へ霧を繰り出す阿蘇五岳 大牟田 鹿子生憲二

晴れてゆく枝の先より小鳥来る 浜田 福本 正嚴

稲を刈る句ひの中をペダル踏む 松山 篠原みどり

色褪せてなほ愛用の秋日傘 高山 大下 雅子

妹も独りになりぬ盆の月 高崎 並木 秋野

ベランダへ図鑑と同じ小鳥来る 平塚 渡邊 久也

種吹いて通草の甘さ残る口 高知 和田 和子

齡など忘れて夢中ホ句の秋 熊本 渡邊佳代子

漁火も景に加へて月今宵 珠洲 松本 寿憲

銃眼の一つ一つにちがふ秋 島原 高比良映子

病癒え新米に食進みけり 松山 三好秀美枝

恙無き暮し守りて大根切る 長岡 佐藤 文子

クレーン車に掴まつてゐる秋の雲 白山 中川外代子
 峡の風黄金に染むる稲穂かな 島原 三好 勝利
 秋の蚊の小さき羽音を侮りし 渋川 後藤 香澄
 太陽の雫のやうな熟柿かな 松山 渡部恵美子
 水澄むや中也の生家訪ふる旅 福島 大西 稔子
 先生が最初に鳴らす瓢の笛 倉敷 三木 瑞恵
 年尾忌や登戸の句碑目裏に 稲城 尾上英美子
 まつすぐに走る軽トラ秋日和 高松 福濱 政美
 秋めくや固きフランプスの耳 大牟田 本田 守親
 もどり来し犬の草の実取つてやる 北九州 元田 品子
 白山の見ゆるは此処といふ花野 野々市 中村 珠栄
 一人居の今日の客とし小鳥来る 輪島 向 佐ち子
 早々と刈田広げて鶴の里 周南 山崎 利晴
 病院が遠くに見えて秋桜 山口 西 やすのり
 土産にと信濃の歌と青林檎 宇部 萬 洋子

爽やかにデイサービスへ杖をつく 朝倉 井手ちくの
 大根蒔く田舎暮らしのパリジェンヌ 堺 西崎ミネ子
 鶏頭に赤き矜持のやうなもの 下関 中村 元代
 稜線を離れし月のもう真上 那珂川 池田ひさ絵
 長き夜を椅子替へて読む句集かな 福津 有島 洋子
 山盛りの無愛想なる衣被 東京 鈴木サキ子
 実石榴や祖国を二つ持つ少女 高知 駒木 基克
 落日に頬を染めたる案山子かな 糸島 宮脇 睦子
 雲放ち雲にかくれていざよへる 高知 長田 貴代
 百歳の歌に手拍子敬老日 阿南 田中 栄子
 里人にあらず里人めく案山子 高知 中村 梅子
 行間に友の気配り文の秋 高松 岡 悦子
 秋高し一舟の水尾光りゆく 鳥取 高田 栄子
 妻を呼び妻が子を呼び月の庭 備前 白石 昌弘
 秋の蚊の遠くの音のまま来る 高崎 宮内 千早

● 山本素竹選

特選五句

掃き寄する音になりたる松手入

鹿兒島 松尾 あやめ

赤とんぼ飛び去る気配なきベンチ

福山 嶋山 洋子

萩の花少しの風にふくらめる

鹿兒島 角屋敷 昭子

爽やかに不登校だと告げにけり

山口 椿 壽子

夕月夜幽かに光る波頭

田辺 細尾 甯代

二句短評

一句目——暫く続いていた松手入も終りに近づく。それは掃き寄せる音。室内にいてそれを感じ取る作者にも安堵の色か。相当の時間を費やした作業。鉄の音から箒の音へと、音に焦点が絞られ、余韻があり季題の効いた一句。

二句目——ベンチに赤とんぼが止まっている。作者に氣づき飛び立ったがすぐ戻った。何遍か繰返したのだらう、よほど氣に入っていると見える。人間のベンチなのだが……とほのぼのする光景。赤とんぼと心の触れ合う作者である。

銀杏の数の重さに折れし枝	倉吉 奥野 玲子
一人居の小さき幸せ小鳥来る	横浜 工藤喜美子
妻がゐてこのままでよし温め酒	長野 加藤 公男
水よりもかすかに霧の匂ひけり	八代 山下しげ人
汚れなき阿蘇の大空野紺菊	久留米 平岡 清志
ばった追ふ声が遺跡を占領す	四日市 伊藤 和子
後の月大和三山暮れにけり	摂津 小西 真子
掃き寄する音になりたる松手入	鹿兒島 松尾あやめ
山の子の団栗拾ふ早さかな	芦屋 山岸 正子
初鴨を待つ平らかな神の池	倉敷 江原由美子
テーブルの朝の林檎の匂ひけり	松山 門田 安世
乗継ぎの一人夜寒の無人駅	白山 辰巳 葉流
秋高し草鞋を結ぶ子規の像	春日 本田 久子
吟行の心足らへり返り花	鹿兒島 坂本 啓子
新米をおむすびにしてお福分け	始良 永田まりりん

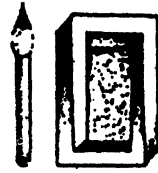
入選六十句

颯風の来るぞ来るぞと舫ひ舟	福岡	津田	富子
母よりも生きて母恋ふ星月夜	札幌	押野	美江
稲を刈る匂ひの中をペダル踏む	松山	篠原	みどり
朝露やしばし光の庭となる	君津	榎本	静江
秋思ふと心の内を見せぬ君	福岡	西村	榮子
手や足の今日はご機嫌秋日和	羽生	蓮見	由美子
寝る前にもう一度見る今日の月	米原	成宮	伯水
名月に雲の空けたる広さかな	出水	沖	弘子
花すすき透けて波うつ青い海	豊後高田	伊丹	淑子
千草活けやさしき妻となりにけり	高山	原田	尚子
妹も独りになりぬ盆の月	高崎	並木	秋野
名月を待つ空の色変はりきし	うきは	大力	妙子
灯しても消してもひとり夜の秋	鹿児島	平山	洋子
自肅解け妻は留守勝ち鰯雲	福山	広川	良子
一夜にて刈田となりし月曜日	長野	勝山	學

新涼の風に五感を研ぎ澄ます	鳥栖	西山	恵二
野の家のともしびつなぎ虫の闇	香川	福家	市子
靴音やひとと鳴き止む庭の虫	松山	高橋	草天
刻々に窓変へ仰ぐ良夜かな	長岡	内藤	孝
高原の星の数ほど露むすぶ	福岡	馬場	紀子
秋の蚊の小さき羽音を侮りし	渋川	後藤	香澄
身に入むやきらりとささる注射針	横浜	小野	晶子
滝音が音のすべてでありにけり	西予	黒田	美穂
十月の空一枚となる高さ	野々市	辻	文江
天上に星をいただき虫浄土	江津	安田	心道
とんぼ来る狭庭に軽き風の立つ	浜田	俵	保恵
爪手入れする指先にある夜寒	彦根	大久保	樹
朝顔に絹の手ざはりありにけり	東大阪	中田	豪起
秋めくや固きフランスパンの耳	大牟田	本田	守親
飛ぶものへ高さを加へ秋晴るる	鳥取	棕	則子

出航の滯耀ける良夜かな 安来 細田 洋子
 灯火親し読むも食べるも卓一つ 堺 山戸 暁子
 秋草を小さく束ね犬の墓 金沢 三島由紀子
 早々と刈田広げて鶴の里 周南 山崎 利晴
 秋茄子の残る一本挽ぎにけり 青森 成田 晃子
 ヘリコプター影の小ささよ秋の峰 芦屋 門脇 重子
 鶏頭に赤き矜恃のやうなもの 下関 中村 元代
 幾度も見上ぐ無月の厨窓 神戸 涌羅 由美
 稜線を離れし月のもう真上 那珂川 池田ひさ絵
 水明り引いて良夜の滯標 松江 小村 四温
 秋晴や吾に安静といふ生活 久留米 谷川 章子
 古里の月は山より山に入る 宇佐 岡嶋あけし
 秋晴や十色にあまる海のを 倉敷 田中恵美子
 見送りの夜風に幽か虫の声 川崎 飯川 三無
 激つ瀬を岩から岩へ石たたき 神戸 池田雅かず

裏道の更くるは速し虫しぐれ 鹿児島 松元 靖子
 妻を呼び妻が子を呼び月の庭 備前 白石 昌弘
 ビル街と言へど落ち葉の増ゆる日々 熊本 西村 孝子
 駅よりの連立つ人のあり良夜 生駒 南 純子
 鍵閉めに出て聞く残る虫の声 郡上 本田 節子
 つる切れてまた遠くなる烏瓜 高松 浅野クニ子
 穂芒の揺れて輝く波となる 大阪 吉川 弘美
 秋灯をともし昼なほ暗き寺 野洲 片山リツ子
 いただきし野菜の中に石榴の実 南砺 岩城 未知
 東京にこんな星空台風過 東京 村上 紗知
 参拝の足留むれば秋の蚊に 大阪 酒井 湧水
 水引のひとつひとつの水の玉 横浜 夏野 猫宙
 秋の蚊のかほそい声にさされけり 東京 小作 紀子
 犬追うてうつかり入る露蓀 豊中 北橋 晃子
 名園の池へ一舟松手入 七尾 橋本紀美子



編集後記

一月や去年の日記なほ机辺

虚子

年が明けても去年の日記が傍にある。まだ去年の思いを引きずっているのかもしれない。新年は気持ちを切り替える絶好の機会のはずだが、誰にでも断ち切れない思いがあると実感する。今日この頃です。

●あけましておめでとうございます。令和四年、新しい年となりました。withコロナとなって三年目。マスク

も検温もアルコール消毒もすっかり当たり前の日常となつてしまいました。ワクチンもいきなりもう安心かと思うと、新たな変異株が現れるというのは、意地悪なゲームのようです。皆さんも同じような思いを抱えているのだと、九月号で募集したミニエッセイを拝見して実感しました。ミニエッセイは今月と来月号で紹介いたします。

●会費の口座引落の申込は今月いっぱいです。ご希望の方はお早めにお申し込みください。俳句カレンダーもまだ若干残部がございます。一部からでもご遠慮なくご連絡をお願いします。

●一月は、協会賞を決める選考委員会があり、今年度の第二回理事会も開催される予定です。去年はどちらも書類での審査&決議でしたが、今年はなんとか対面で行えそうな状況です。事務局はなかなか忙しい月となりそうです。

須川 久恵

●花鳥詠選選者予定

掲載	締切り	選者	
4月号	1月20日	稲畑汀子	浅井ひと詩
5月号	2月20日	木村享史	和田華凜
6月号	3月20日	岩岡中正	永森ケイ子
7月号	4月20日	木村享史	持永真理子

花鳥詠一月号(通巻第四〇六号)

定価二五〇円 但し、本代は年会費を含む

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年一月一日

発行人 稲畑 汀子

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八一九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇一七二八六八二〇

印刷所 日本ハイコム㈱

〒112 0014 東京都文京区関口一一九一二